

羊のゆうきとの別れ

3年1組では、5月から肉用の羊のゆうきを飼い始めました。体重も70キロを超え、出荷の日が11月11日と決まりました。そのことを子どもたちに伝えると、Aさんは振り返りに、「わたしは、ゆうきといのが楽しみで毎日早起きして早い電車で来ています。私よりも年下なのにいつも励まされています。ゆうきはわたしのお守りです。出荷したら会えないけどせめて毛だけはもらいたい」と書いていました。

ゆうきの体を全て使うことが命を大切にすることだと考え、毛刈りの下調べを進めていたわたしは、クラスみんなにAさんの思いを伝える場を設けました。みんなはどう思うのだろうかと緊張した面持ちでAさんは語り出しました。

「ゆうきと一緒にいると楽しくて、ずっと一緒にいたくて。毛をお守りにして持っていて、ずっと一緒にいたいな」

すると、それを聞いた友だちも、「わたしも、ゆうきを見ていると元気が出る。わすれないように毛刈りをして毛をとっておきたい」と続けました。

早速、ゆうきがいた牧場の小林さんに毛刈りにきてもらいました。

子どもたちが周りで見守る中、ゆうきはおとなしく毛を刈られていきました。小林さんも、「みんなと一緒にいたから安心したのかな」とお話ししていました。子どもたちは、姿が変わっていくゆうきを見ながら、これから来る別れの日を実感したようでした。



ゆうきがいなくなって2週間が経ちました。教室にはゆうきの毛が置いてあります。Aさんの「ゆうきとずっと一緒にいられるようにお守りを作りたい」という願いから、毛刈り、原毛洗い、染毛と準備をしてきました。

子どもたちの中にある空白を埋めようと、ゆうきを食べた後も「自分の中にゆうきがいる」と感じられるように互いの思いを語り合ってきました。しかし、子どもたちの様子から感じるのは、「必要なのはそういうことではない」ということでした。

いよいよフェルト作り当日、西浜先生にニードルの使い方を教えていただいたあとは、一人一人のイメージするお守りを作っていました。チクチクとニードルを指しながら集中した時間になるのではないかと思っていましたが、静かなのは最初の方だけで、ゆうきの形ができてくるにつれてどんどん賑やかになっていきました。ゆうきのことも、フェルト作りのことも、遊びのことも、どこかで何かおしゃべりをしながらチクチクとしていました。

この雰囲気はなんだか、ゆうきの周りにいたときと同じだなと思いました。そして、ゆうきを形にすることで、ゆうきとの暮らしの一つの区切りになったような気がしました。